

## 燉煌發掘寫經の研究

高 柳 恒 榮

### 一

こゝに起草せんとする研究の範圍は、近時燉煌石室より多量に發見せられて、斯界の學壇に蘭菊の美を標してゐる各種の古寫經全般に互つての記述ではない。今度大谷派本願寺法主より、我が大谷大學へ御下賜になつた所の、學術的價值に於て貴重なる二十有數種の燉煌古寫經に就いて、內面的本文批評は後日に待つこととし、今はその外觀的に少しく解説を加へると共に、スタイン氏、北京學部、その他二三のそれら蒐集本とを比較して彼此兩者の異同を記述するといふ程度で、この稿の歩を進めて行くこととする。

### 二

順序として燉煌地方の勢情及び石室發掘探險の徑路等の概要を一見するのも、本題を取扱ふ上に不都合はあるまいと思ふから、それより始めやう。燉煌 (Tunhuang; Tunhwang) は、支那甘肅省安西府に在る縣名である。この地は時代によりて、その名稱を異して(この例は西域地方に頗る多い)

ゐて、唐時代には瓜州といひ、元時代に沙州といふのは此地方を云ふたのである。漢時代にありては、武帝の太初四年 (103 B.C.) に燉煌郡を置きてから代々西域との政治外交上須要なる地點となつた。何となれば、この地は地理上から見ても、支那から西域地方に通ずる南北兩道の出發點にして、古の玉門、陽關を去ることが遠くない。他面支那對諸蕃の政治的位置からしても、近きは西域諸地方を始め西藏、印度より、遠くは波斯、其他の西方諸國との交通の要衝の地であるから、古代には東西に起れる宗教、文化の潮流が、湊會交通する一大驛亭となりて、當時最も威力を恣した佛教は勿論、摩尼教、景教等の異宗教も雜然として交りこゝに一種複雑なしかも燦然たる文化を形成し、其言語も支那語、梵語、西藏語、突厥語等諸國語の外に、固有の西域諸邦の言語を網羅し、極めて異彩を放つた賑やかな奇觀を呈したのである。かの支那よりは東晋の法顯、大唐時代の英僧玄奘等の入竺僧、西域印度よりは多くの譯經僧こゝを通過し、或ひは留りて翻經に従事するものも多く、中には燉煌菩薩、或は月支菩薩等の尊稱の持主で翻經界の傑僧竺法護 (Dharmarakṣa) (梁傳一) をも輩出した。従つて堂塔盛に起り、就中縣南鳴沙山の麓の一小流に臨んで東面して建つてゐる講學修道の大道場の三界寺 (又雷音寺とも稱す)、及びその左方に、精妙實に眞にせまる雕像、壁畫、を以て満たしてゐる莫高窟 (俗に千佛洞と云ふ) の如きは、現今こそは頽廢甚だしいが、その昔凡そ西曆紀元前後から同五六世紀に至る數世紀の間宗教、藝術、文學あらゆる方面から見て如何に莊嚴

隆盛であつて、殊に佛教文化の黄金時代を形成してゐたかは、近時諸種の探險家によつての研究報告並に發掘遺物によつて略々推知することが出来る。今法顯(400A.D.)、玄奘(629A.D.)が、此地を通過した時の狀況を見るに佛國記(致二<sup>a</sup>)によると法顯が此地で太守李浩から供養を受けて後沙河を度りて南道の鄯善に進んだのであり、又大唐大慈恩寺三藏法師傳上卷(10<sup>a</sup>)には、玄奘は此所で資具を求め、沙漠に習熟してゐる所の胡人、赤馬を得て出發した事が見えてゐる。かく外國僧を歡待した事狀から考へて見ても燉煌地方は西曆五世紀の初頭頃には佛教が盛んであつたことが推測されやう。元初のマルコポーロは此地を經、Sachion(沙州)の風俗、宗教の狀態を記し、“there are in this country a number of monasteries and abbeys, ”……と云ふ。

前に述べた如く、一時異彩ある文化を形くり、且つ佛教極盛の燉煌地方は、人爲的の破壊を受、ると共に、天變地異の自然の慘害の爲めに全く變化して、到底昔日の繁華な驛亭を見ることが不可能になつて、古昔の莊麗なる大寺佛塔は、今や往時の榮華を語るのみである。然し學術の進歩は到底永く、この無盡の寶庫たる石室を開かずして、荒殘廢滅に委しては置かぬものである。こゝに於て燉煌石室の發掘が開始されてからは、その石室中より思ひ設けぬ千年の古鈔卷子が萬を數へて出て來るといふ風で、その發見せられた古經、逸書、壁畫、刻文、寶器、佛像等は、悉く五代以前の鈔本に係り、其大部分は經卷であると雖現時世間に流布刊行せざる古記の類が少なくない。又その種類

からしても多種多様であつて、佛教に關する經典を第一として道教摩尼教、歴史地誌等にまで亙つてゐる。かやうな次第であるから、皆一として新學術の資料とならぬものはなく、その雄麗な壁畫や稀有の經卷がごし／＼歐洲の博物館に送られて別様の光彩を發揚して學界に一大光明を輝かしてゐる。實に奇蹟に等しいものであらう。

### 三

然らば燉煌石室發掘は如何なる經程を辿つて今日の莊觀を呈するに至つたであらうか。それは極最近のことで泰西の學者がこの方面の研究に着手して以來未だ五十年に滿たない程であるけれども、その熱誠にして眞摯なる努力は已に顯著なる功績を擧げたのである。即ち石室發見の端緒は、光緒十一年(1885 A.D.)に千佛洞を管理してゐた所の道士が、該石室を修繕する爲め側壁を穿つた所始めてその中に書籍、繪畫等が無盡藏なることを知つたのである。之れ恐くは十世紀頃外難の爲め古書の散逸せんことを慮りて此所に密封して今日に至つたものであらう。この事が泰西に傳はり、こゝにスタイン、ペリオ等の大仕掛の學術探險となり、その結果は洋の東西を問はず學界を振動せしめたのである。

最初に此所に手をつけたのは、英國のスタイン(M. A. Stein)氏であつて、彼は一千九百七年(光緒三十三年)より同八年に亙りて燉煌石室の發掘を試みた。その結果同地の千佛峯の石壁中に於て祕



藏せられた、古經幀幅幀幡に畫かれた佛畫其他二十四の大匣を得たのである。これは千佛嶺を守る王道士からスタイン氏が種々交渉して僅に五百ルービーで手に入れたので、此の二十四匣の經文は北魏時代より唐朝の美術を包含せるものであつて何れも完本に等しく梵語あり支那語あり回鶻語あり西藏語あり寫本刊本、卷き經貝葉折本綴本等の各種を合せ其數實に萬餘に上るといふことである。その燦爛たる研究報告が、*Ruins of Desert Cathay*; 2 vols. 1912. *Serindia*; 5 vols. 1921. *The Thousand Buddhas* 等の浩瀚な大著となつてロンドンから出版されてゐるが恐らくこの種の著書としては各方面に於て最高權威をなすものであらう。前者は旅行記式のものであるが、中者は研究的の名著、後者は寫眞版であつて前兩者の記事は如何にスタイン氏が偉大の人材たるかを充分に示してゐる。(内容は之を略するから本書を一讀されん事を望む)實にス氏の發掘研究は、その尨大に且つ有益なる報告書を公刊して學界に貢獻せられた所のは實に莫大であつた。ス氏の後に續いて燉煌探險を行つたのは佛國の東洋學者ペリオ(Paul Pelliot)その人である。彼はス氏が千九百九年に英國に歸つた時に千佛嶺に來て王道士に問ひスタイン氏に讓與を肯せなかつた分の石壁中の古書(西紀六〇〇年から一二〇〇年頃に至るもの)約九千卷を買得して佛國に歸つたのである。この中には佛敎經典大多數を占めてゐる。彼の“*Les Grottes de Touen-houang*”の寫眞集はこの地方探險の成果であらう。北京の羅振玉氏の考證をして公刊された「燉煌石室遺書」四卷はこの一部である。

かくの如く量と質に於て價值ある學術資料を學界に提供された兩氏の勞は多とせねばならぬがし  
かしこゝに遺憾なる事には彼等は佛教に對しては殆んど門外漢で充分なる豫備知識を缺くが故に、  
折角世界的の大寶庫たる燉煌の藝術に接しながら外の文書、工藝に就いてはともかく佛教經典に關  
してはその研究問題の中心に觸れず爲めに前記の龍大なる著書はその内容比較的精細でありながら  
唯考古學的的美學的な皮相の研究に終つてゐるのは残念な事である。それで東洋學殊に佛教經典の内  
面的觀察をするに最も便利な立場に置かれてゐるのは吾々であらうと思ふ。餘道に入つた様である  
が、ともかく彼等の旺盛なる知識慾と組織的な綜合研究に基づいて此千歳の遺寶が廣く世に學術  
的に報告されたことに對しては滿腔の尊敬と感謝を表するものである。かくてスタイン、ペリオ兩  
氏の購入せる以外の古典數千卷は北京學部に移つたのであつて、今度大谷大學に將來せられたる二  
十數種の經卷も恐く此等孰れかの中の一部であらうと思ふ。かるがゆへに餘談のようではあつたが  
燉煌寫經發掘の事狀を少しく述べた次第である。

#### 四

寫經解說の前に燉煌石室の狀況を一言すべきであらうが今は直接の問題でないのみならず已に前  
記の諸著に精細に記述されてゐて參考資料は可なり豊富に提供されてゐるから今は之を略する。し  
かし前記の諸著は浩瀚であると思はれる讀者は、東洋學報第四卷第一號に堀謙德氏が「スタイン氏

支那漠地の古蹟」と題して、スタイン氏の“Ruins of Desert Cathay”の概要を紹介してゐられるから、それに就て見られる方が便利である。尙現代佛教第一卷第七、第二卷第九號に小野玄妙氏が、「燉煌の藝術と佛教」といふ論文を出されてゐるから、これも參照せられたならその一般の事狀を知ることが出來やう。次に燉煌寫經に關しての研究發表の重なるものとしては、先づ松本文三郎博士が藝文二ノ五、六に「燉煌石室古寫經の研究」と題して、先年京都帝大の諸教授が支那へ出張して研究調査して歸つて來られた燉煌寫經の由來を論じてゐられるものがある。この論説は燉煌寫經の種類性質由來並に一般寫經に對する概念を知る爲には有益なる發表であらうと思ふ。(松本博士著「佛典の研究」一一八頁に編入)次に妻木直良氏が東洋學報第一卷第三號に「燉煌石室五種佛典の解説」と題する論文を掲げてゐられるが、これも學界を裨益する所のものであらう。而してこの論説の内容は、標題の如く燉煌發見の五種佛典の解説であるからその範圍は狭いが佛教經典史研究には見逃してはならぬ。また矢吹慶輝博士の「スタイン氏蒐集燉煌地方出古寫佛典クラフト解説目録」(宗教研究二ノ五、六、八)、「燉煌出土疑偽古佛典に就いて」(同三ノ十)等も頗る有益なる參考論文である。その他宗教研究、宗教界等に燉煌寫經に關する部分的の記事がある事を一言附加して大谷大學の燉煌寫經の問題に移つて行くこととする。

大谷大學所藏の燉煌寫經は全部で二十九卷であると思はれてゐたが研究の結果は二十八卷であることが發見された。何となれば（この事は後に至つて記述する通り）大學の手に入る以前に誰れが如何なる譯に爲したかは知らぬが、ある一卷の長き經文中途から引き裂きてそれを一卷とし合計二十九卷としたのである。それであるから今は二十八卷として説明して行かう。

この二十八卷の經卷は文字上からは全部漢譯經典ではあるが藏内藏外色々の經典が雜つてゐて、その中首尾完全なる經は僅に二卷であとは全部或は首、或は尾或は首尾共に破損してゐるものもある。だからその經論が何であるか探索するに頗る困難を感じたものもあつた。就中首部の缺損してゐるものが多いが、これは不思議なことではない。何となれば長年月の間石室に保存されてあるうちにその卷子たる故を以て卷首の方から次第に風雨等の自然の慘害を蒙つた爲めであらう。而してその種類としては大乘經中華嚴部に屬するもの二、方等部に屬するもの四、般若部に屬するもの三、法華部に屬するもの四、涅槃部に屬するもの二、小乘經に屬するもの三、小乘律に屬するもの一、祕密部に屬するもの一、大乘論に屬するもの二、現行本の藏經の孰れにも符合せぬもの及不明のもの六、となつてゐる。この中には佛敎經典の本文批評並びに經典の書史學的研究材料として學術的價值に於て無價の珍寶がある。これから順を追つて少しく解説を加へて見ると次の様である。（解説の順序及標準は縮刷藏經に據る）

(1) 華嚴經十廻向品

本經卷は首尾共に缺損し且甚だ腐蝕してゐる爲め何經であるかを見分けるに困難を感じたが、遂にはこれが六十華嚴(佛駄跋陀羅譯)で天帙第八卷に編入されてゐる十廻向品の一部なることを發見したのである。縮藏によると天、八、初には「金剛幢菩薩十廻向品第二十一之八」と段を切つてあるが該寫本では段を切らず文を連續してある。奥書がない。一言すべきは支那敎理上大切にして四大翻譯の一なる華嚴經が燉煌寫經中には餘り見えないらしい。それにつき松本博士は華嚴經研究は支那に於て一體に後れてゐるのであるから自然燉煌地方へも多く傳らなかつたのであらうと言はれてゐるが或はそうかもしれぬ。

(2) 大方廣佛華嚴經卷第五十

燉煌寫本では尾題に「華嚴經卷第卅七」とあるのは縮藏編入の何れであるか全く不明であつた。それで寫本には四十といふ數字に卅の字を當てゝあるから本寫經は華嚴三譯中の四十七卷目であらうと思ひ六十華嚴、八十華嚴の孰れもの四十七卷に當てゝ見たが全然符合せなかつた。然る所研索の結果縮藏天、九、に編入されてゐる佛陀跋陀(359—439 A.D.)譯の第五十なることを確め得た。一體燉煌寫經には斯の如く現行本の經題品數並に品名と符合せぬもの頗る多く、甚だしきに至つては同經でしかも經文の出沒長短の著しいものがある。だから寫本の經題、品數等を以て縮藏等の現行本を

探しても見當らない場合がある。(1)もその例である。(こゝに所謂本文批判が重要となつてくるのである) 本經は經首は破損してゐるが經尾は完全で殊に立派な奥書が付いてある。しかし注意すべき事は經後は寫本と現行本と異なる。即ち寫本は縮藏よりも約五行短く縮藏の「彌勒佛等一切諸佛」(天、九、47b.8)の所へ直ぐ經題を付してある。この相違は譯者にあるか筆者にあるかは充分研究して見ぬとわからぬ。

次に奥書を見ると、

延昌二年歲次癸巳七月十八日燉煌鎮經生疑顯昌所寫經成訖竟。用番廿二。典經師令狐崇哲。校經道人。

とある。延昌二年は魏の宣帝の年號で梁の武帝天監十二年(513A.D.)に當る。而して六十華嚴は東晋の佛馱跋陀(Buddhabhadra)が安帝の義熙十四年(A.D.418)から元熙二年(A.D.420)六月まで約三ヶ年かゝつて譯してゐるからこの寫經は翻譯を去ること九十三年後にはや燉煌地方に書寫されてゐた事かわかる(谷大本中恐く本寫經が最古のものであらう)。又北京學部及びスタイン蒐集本の中にもこれと同一種類の華嚴經がある。煩しいが參考の爲め兩者の奥書を出して見ると次の様である。

(イ) 北京學部本、華嚴經卷第廿四の奥書

延昌二年歲次癸巳八月廿七日燉煌鎮經生令狐崇哲所寫經成訖竟。用紙廿四張。校經道人。

(ロ) スタイン本、華嚴經卷第十六の奥書

延昌二年歲次水巳七月十九日燉煌鎮經生令狐禮太寫此經成訖。用帀廿四張。校經道人。典經師令狐崇哲。

今此等二者と大谷大學本とを比較して見ると、その年號、筆蹟が全く同く。三者共に令狐崇哲の名が見えて且つ方一寸位の黒印が奥書の上にあるのは實に面白い。惜しい事には三者共に校經道人の名を逸してゐることは殘念であるが、前後兩者の典經師及び中者の寫者が令狐崇哲なることは明である。(崇哲の傳審ならず)この外にスタイン本の中に「延昌二年歲次癸巳六□□日燉煌鎮經生錢顯昌」とある奥の不明經典があることを一言して置く。

(3) 十輪經卷第五

本寫本は方等部に屬するもので經頭なく卷尾あるが奥書はない。頗る字體のよき寫本である。この十輪經寫本と同種のものが汪大燮所藏の燉煌寫經の中にもあるといふことが妻木氏の論文(東洋學報一ノ三)に見えてゐる。今之と同本につき縮藏を閲すると玄帙第七冊に、

〔大乘大集地十輪經 十卷 唐玄奘譯

大方廣十輪經 八卷 失譯、今附北涼錄

の二譯あるが、谷大本は後者に屬してゐて、縮藏の尾題は大方廣十輪經卷第五となつてゐるが寫本

は單に十輪經卷第五となつてゐる。汪大燮本も後者の北涼譯に屬し、就中現存宋本の底本と同一らしい。

本經は略して地藏十輪經といひ、具さには大乘大集地藏十輪經(十卷)といふ。その玄奘譯は唐の高宗の永徽二年(西曆六五一)の譯で大乘防法師の序があつて八品より成つてゐる。失譯の方は玄奘譯と同本なるが經文の出沒が多く八卷となつてゐる。又唐不空譯に延命地藏經二卷あるが之は明に後代の僞作でその本源は前者に據るものである。

#### (4) 維摩詰所說經卷下

本寫經は無首有尾で二譯ある中鳩摩羅什譯の三卷本の下卷(黃、七所收)の一部に相當する。此經も現行の縮藏の經題と符合せない。即ち寫本では維摩詰經卷第四とあるが縮藏では維摩詰所說經卷下となつてゐる。しかし此經は維摩詰所說經の囑累品第十四たる事は明かである。奥には、

大唐垂拱四年歲次戊子十二月一日清信優婆夷王伯美爲身染痾痢及爲一切法界蒼生敬寫維摩經一部願使從今已去三□助□疫癘消除普願衆生共成佛道

とある。鳩摩羅什 Kumārajīva (344—413A.D.)は東晋の安帝二年(西曆四〇六年)に此の經を翻譯してゐる。然るに本寫經の出來た垂拱四年は唐の中宗の頃の年代で西曆六八八年に當るから、羅什が譯して以後二百八十餘年頃にして燉煌地方に書寫されたもので、又この垂拱四年はかの彥悰が太慈恩寺



三藏法師傳十卷を選述した年である。(垂拱四年は則天武后の年號で中宗では嗣聖五年に當る)そして本寫經は清信優婆夷の王伯美といふものが疫癘消除の願經として所寫したものらしい。

こゝに注意すべき事は燉煌寫經の奥書を見れば首肯出来るがその中に願經の意味で書寫された經卷が頗る多いことである。本經もその例に漏れないものであるが、之は要するに、經典には常に書寫及び讀誦の功德が說かれてあるから上は國王より下は父母眷屬乃至一切衆生の冥福利益を祈願する目的に盛んに書寫せられたものであつて、燉煌に限らず我が朝にもその類例著しい。後に出る佛名經の如きは最その好適例であらう。維摩經は後漢の嚴佛調以來後秦の鳩摩羅什の頃に至る約二百年間に六回譯され、東西兩晋の頃には三翻譯があつたらしい。

### (5) 悲 化 經

本寫本は經の首尾共に缺けてゐる故何經が不明であつた所、調査の結果曇無讖 Dharmakṣa (385—433A.D.) 譯の悲化經(宙二)第二卷の一部なることが明となつた。

悲化經 (Karuṇapūṇḍarīka) には大乘大悲分陀利經八卷(失譯)といふ同本異譯ありて共に縮藏宙、

三に編入されてある。智昇の開元錄第四(結四七左)の道襲の下に「悲化經十卷第三出、與法護閑居經及大悲分陀利曇無讖悲化經等同

本、房云見古錄、似是先譯與更刪改、今疑即無識出者是

……悲華經一部十卷闕本」とあり、又歷代三寶記第六(致六四左)の法護の下

に、「閑居經十卷」とあるより見れば、本經の異譯闕本に二種あつたのである。(開元錄第十四結五三右參

照) 又開元錄第二、法護の下に「閑居經一卷與悲化經等同本異譯初出見僧祐錄」ともあるから、これも直接にか或は關係にか本經と關係があつたらしい。終りに本經は六品に分れて蓮華尊佛の成等正覺の事より其本生を説き、過去恒河沙阿僧祇劫の昔、阿彌陀佛等と共に寶藏如來の下に於て記別を被れること等が述べてあつて、殊に第四諸菩薩本授記品に記せる無淨念王發願の因縁は無量壽經の說に相似てゐる所から親鸞聖人も御本書の中に其文を引用せられてゐる。

#### (6) 寶梁經卷上

本寫經は首部は缺けてゐるが卷末は完備し、尾題には寶梁經卷上としてあるが現藏經にはその通りのものなく、實は方等部大寶積經卷第一百一十三(地六所收)の寶梁聚會第四十四の第三、第四兩品と同じもの即ち栴陀羅品第三(寫本では栴陀羅沙門品とある)と營事比丘品第四とである事を確め得た。此は北梁沙門釋道襲の譯である。開元錄第四(結四三十三左)道襲の下に「寶梁經二卷今編入寶積、當第四十四會、見竺道祖河西錄及僧祐錄」とあるのはその間の事狀を傳へてゐるものであつて、二卷としてあつた事が知らる。大體大寶積經といふ經典は多種多様の衆經典が、集められたもので百二十卷からなり縮藏では地帙の年から六の六冊に互るもので、四十九會七十七品から成つてゐる。而して大寶積經は唐中宗の神龍二年より睿宗の先天二年(706—712A.D.)に至る七年間に譯出編次した。之より先玄奘三藏に高宗の麟德元年(A.D. 664)正月門下がこれを譯せんと乞ふたが死期近きを知り玄奘がこの譯業を中止したともい

ふ。

今燉煌寫經の奥書を見ると、

夫至智淵深非宣教法無已可會其真教法要須言誓深崇而得是以比丘惠愷自惟福薄生羅運末前不及釋迦九會後不經彌勒三唱於中苦切何時當住是已仰尋聖教欲使將來超出生死之海莫若崇善是以即仰寫寶梁經一部兩弓而成願因此福使愷七世父師長父母現在眷屬及以知識一切含生有識之類乘此微福願託生西方無量壽佛國長求三趣永與苦障并三界慶因果成佛道所願如是普同斯哲

である。この奥書から考察すると例の如く寫經の功德を利用しその冥福追善の供養經たることは論を俟たぬ。殊に文中に見える願託生西方無量壽佛國等の文は注意すべきことであらう。支那に於て彌陀淨土を欣求する思想は道安の後久しからずして盛に起つたもので（それ以前にも幾分あるが）道安の淨土論六卷（缺本）はこの種の最初の著であらう。中にも弟子慧遠の如きは白蓮社を結び一時盛觀を呈した。此れより以後彌陀の信仰は彌勒のそれと共に一部民間に行はれ、唐代に至つてから彌陀淨土の信仰は大分各地に隆盛であつたらしい。

（7） 摩訶般若波羅蜜經

本寫本は首尾共に揃へる完全なる經卷であつて、卷初には「摩訶般若波羅蜜深功德品第十七 卷七」  
とあるが、縮藏には小品般若波羅蜜經卷第七と題し、次に行を改めて、深功德品第十七とある（月、

六所收)。又後題を見るに寫本では「摩訶般若波羅蜜卷第七 小品」としてあつて縮藏の小品般若經卷第七といふ題名とは異なるが内容は相同じ。次に奥書には、

菩薩戒弟子張洪元敬寫流通供養

とある所から見れば張洪元なる者が供養の意味で書寫したことが察せらる。支那の佛典翻譯史を見るに諸種雜多の經典が譯せられてゐるが、就中般若の翻譯は殊に多く華嚴、法華、涅槃と共に四大翻譯の一に加へられてゐる。かの後漢の支婁迦讖 (Lohanakṣaṇi) より唐以前の頃までに該經の翻譯がその數約十九部百四十七卷の多きに達してゐる。又僧傳を檢しても、學界に名のある學僧は大抵皆般若の研究者であつて、例へば朱子行、唐僧淵、道安、慧遠等これである。就中晋代の學者は殊に然りであるが、この現象は晋代は特に老莊の書が一般社會に盛に讀まれたからでその思想と類似せる般若が流行せるは寧ろ當然であらう。

(8)(9) 金剛般若經

此經卷は同じきもの二種あるが故にいま合して解説することとする。而して兩者共に首部は破損してゐるが尾題に據れば何れも羅什譯(月、九)金剛般若經たること疑ない。(菩提流支や眞諦譯のそれではない)解説の順序上此れをA.B.とすれば、A.には次の如き學術的研究上重要な奥書がある。

咸亨四年二月十一日羣書手蔡義愔寫

用紙 十二張

詳閱 太原寺大德嘉尙

裝潢 手解集

詳閱 太原寺主慧立

初校 書手蓋新

詳閱 太原寺上座道成

再校 書手蓋新

判官少府監掌治署令向義感

三校 書手蓋新

使太中大夫守工部侍郎永興縣開國公虞

詳閱 太原寺大德神符

この奥書によれば、蔡義愷といふものが本經を書寫してから三人の校正、四人の詳閱を経たもので寫經の中でもこれだけ嚴密に校閲を経た經文は實に稀れであつて、經典としては殆んど遺漏なきまでに完全なものであらう。今本經の奥書とよく似たものが北京學部本とスタイン本の中にある參考の爲め出して見ると、

北京學部本

スタイン本

上元二年(西曆六七五)寫妙法蓮華經卷四の奥

上元三年寫妙法蓮華經卷第二の奥

用紙二十張

裝潢 經手解集

裝潢 人解集

初校 普光寺僧玄遇

初校 會昌寺僧玄福

再校 同 同

再校 會昌寺僧藏師

詳閱 太原寺大德神符

三校 會昌寺僧儒海

同 同 大德喜尙

詳閱 太原寺大德神符

同 同 主慧立

同 同 大德喜尙

同 同 上座道成

同 同 主慧立

判官司農寺上林署令李德

同 同 上座道成

使朝敬太夫守尙會奉御閤玄道監

判官司農寺上林署令李德

使朝敬大夫守尙會奉御閤玄道監

である。今此等三本の奥書を對比して見ると、筆者及び校訂者は各本異つてゐるが、詳閱者は三本共同人である。されば此等四人の詳閱者は當時の敎界に於て相當地位ある碩學であつたにちがいない。而して前に述べた人々を調べて見ると蓋新、玄遇、神符等の傳記は之を知るに由がないが、嘉尙、慧立、道成等の人々は幾分傳記が明かであるから少しく述べて置かう。

喜尙、慧立は共に玄奘門下にその名を馳せた學僧である。先づ嘉尙の傳は贊寧が宋高僧傳卷四（致、四<sup>五</sup><sub>五</sub>）に載せて云ふには

釋嘉尙、未知何許人也、……隨奘於玉華宮譯大般若經、充證義綴文、多能傑出、及三藏有疾、命尙具錄所翻經論合七十五部總一千三百三十五卷、……寫經放生然燈令尙宣讀、奘合掌歡喜

曰、吾心中願也、汝代導之得沒而無悔焉、樊卒、著述疏鈔出雜集、義門夥多、天后朝同薄塵靈辯等、預譯場證義、功績愈繁、……

と。宋傳によると、彼が太原寺に居た事は一言も見えてゐないが慧立と同時同門であるから、慧立が太原寺主になつてから嘉尙も太原寺へ來たものではなからうか。次に慧立の傳に關しては元の曇噩が著した新脩六學僧傳(十六卷)には、

唐慧立生而岐嶷不群、志學之年出家、隸鄉里昭仁寺、時貞觀三年(西歷六二九)也、久之詔充大慈恩寺翻經大德、又補西明寺都維那、後受太原寺主、皆領其寺任、及高宗尤愛其博考儒釋、雅著篇章、辭辯雲飛、材思泉湧……

とあるによれば、以てその人材の當時學界に如何に透越してゐたかが、窺知され得る。本傳によれば慧立は不出世の材を以て太原寺主になつたことは疑ふ餘地がない。最後に道成の傳に就てゐるが、これは確かに言へぬが宋傳十四卷(致五十八)に「唐京兆恒濟寺道成傳」と題して、

釋道成者不知何許人也……垂拱中(天後の年號)日照三藏譯顯識等經、天後詔名德十員助其法化成與明恂嘉尙同預證義、由是聲飛神甸位首方壇……

の記事が見えてゐるがこゝに道成とあるのは恐らくそれではなからうか。若し然うであるとしたならば今の宋傳にある通り、彼も嘉尙と共に天后の詔により證義に與つたに違ひない。とにかく年代

が一致し、特に天后の朝日照三藏の譯場が太原寺である所から見てもそれは同人たることは疑ない所であらう。かく考へて行くと本經は當代の第一流の學者によつて詳閱せられた貴重なる珍品と稱するに足る。(本號口繪參照)

B.は經文に於て同種のものであるが、用紙及筆者は兩者相異るらしい。只經の後題に於て前者Aには、金剛般若經とあるも、B經には金剛般若波羅蜜經(朱書)とあつて奥書に「彌安君金剛一□日五長(？)(朱書)とあるのみ。こゝに一言注意すべき事はA. B.兩者共に那謨婆伽跋帝以下の眞言がない。そうすると此寫本は宋、元、明三本と同系のものから所寫したものであらう。最後に本寫經の年代に關してであるが、咸亨四年は唐の高宗の年號で西曆では六七三年に當る。羅什は東晉安帝五年(西曆四〇一)に本經を譯してゐるから、それから二百七十餘年を経て本經が燉煌地方に所寫されたのである。

(10) 妙法蓮華經卷第三

此寫本も卷首は破損してゐるが後部が存してゐてその尾題は現行本と全同である。この寫本は縮藏の盈昃第一冊に編入されてゐる羅什譯であるがこの次の(11)(12)(13)等の三本も亦羅什譯で、盈一に入れてある。奥書には、

菩薩戒弟子蕭大嚴敬造 第八百八十六部



とあるが、これには別に取り立てゝ書くべき事もない。只奥書の下に第八百八十六部とあるのは何を示すものであらうか。思ふに寫經の部數をあらはしたものであらう。筆力大によい。

(11) 妙法蓮華經卷第五

本經寫本も無首有尾であるが、縮藏の卷末と寫經の終りとを比較して見ると、現行本では壽量品第十六、分別功德品第十七を終つて右の如く寫本と同じ尾題を付してあるが、寫本を見ると從地踊出品第十五品の次へ直ちに妙法蓮華經卷第五の題號をつけてあつて、第十六、十七二品を省畧してある。奥には第一千八百七部と弟子蔣考璋造流通供養とが別行になつてゐる。この奥書から見ると(7)と同目的の爲に所寫されたらしい。

(12) 妙法蓮華經妙音菩薩品第廿四

本寫本は寫經中稀に見る卷首があつて卷尾が缺けてゐる。而して經題に就き縮藏と寫本とを比較して見ると、藏經の初めには妙法蓮華經卷第七と妙音菩薩品第二十四とは別に行を改めてあるが寫本卷頭は同行になつてゐる。即ち

妙法蓮華經妙音菩薩品第廿四 七

と。

(13) 法華經普門品

本寫經は初めはなく尾題があつてそれには妙法蓮華觀世音經一卷としてあるが、之を縮藏に對照すれば、法華經第七卷の妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五の殆んど全部に相當する。しかし寫本を通讀すると途中で用紙、筆者共に異つてゐるが經文の連續には差支ない。奥書には爲亡妻李敬寫とあれば、本經も有人の供養の爲めに書寫せられたものであらう。

以上谷大本中に法華經の卷子本が、四卷あつて何れの種類よりも多い。然れども四者共に筆者及び用紙が各々異なる。先づ法華經の傳譯を一言して見ると、三國時代吳の支彊梁接 (Kai-kiang) が之を譯して法華三昧經六卷(開元錄第二(結四、十三右)口一本有正字、初出、興法護正法華等同本、見空道祖魏錄、亦見始興錄)を譯してから隋代頃までその譯頗る盛であつた。西普法護が正法華經十卷(盈二)を譯して以來(西曆二八六)般若と相ならんで多くの佛學者に研究せられた。それ故に法華經も般若と共に四大翻譯の隨一に數へられてゐる。だからスラインの蒐集本の中にも亦北京學部本中にも法華經の寫本が、外の寫經よりも割合に多量に發見せられるのは、畢竟燉煌地方に本經が多く流行し書寫されたことを證するもので、これがやがて支那に於て本經が盛に研究されたといふことを反證するものであるといへやう。

(14) 涅槃經聖行品

本寫經は卷首卷尾共に破損して何經なるや判斷に苦んだが幸に寫本の中に大般涅槃經聖行品第七(縮藏では大般涅槃經聖行品第七之一に當る)の細目題があつた爲め、涅槃經第十一の聖行品の一部

なることが明白になつた。寫本は字態は美麗なるが非常に損蝕せられてゐる。因に本經文は曇無讖譯の大般涅槃經(四十卷)の一部に一致し縮藏では盈帙第五卷に編入さる。(本經は西曆四二一年に譯せらる)

(15) 大般涅槃經第三十

この寫本は次前の(14)と同類同譯の經であつて縮藏では盈六にある。復本寫本は例の通り卷初はないが卷尾は備つてゐるとは雖。縮藏と比較すると出沒あるが様である。即ち寫本の經の終りを縮藏本に比すると經文が約一頁と五、六行程闕けてゐる。即ち慧捨二相亦得如是(盈、六<sub>九</sub>四十行)の次にすぐ尾題がある。この點は注意して研究すべきであらう。又奥書によれば、

永興二年二月十日水曹參軍夏生所供養經 一枚竟

とあるから供養經たることは疑を容れない。

終りに涅槃經の翻譯も後漢の支婁迦讖の梵般泥洹經二卷(闕本)譯以來數種の譯經が顯はれてから、學者の間に般若、法華、華嚴等と共に頗る盛に行はれた。就中宋代の道生(梁傳第七)が出て本經の價值を世に宣傳し、從來の漸悟説を破り頓悟成佛の英論を唱道してある一面で、佛教界の蒙を開いた。それ以後は涅槃を以て名を著したものの多く、寶亮の如きは一生中に凡そ八十四編も大涅槃を講じ敎により大涅槃義疏を著したともいふ。

(16) 佛本行集經第一

本寫本は(7)と同じく首尾共に完全なるが文字に一寸特長がある。而して本寫本の卷首には、  
佛本行集經發心供養品第一一卷之

三藏法師闍那崛多譯

北天竺提達國婆羅門沙門闍那崛多隋言德志歸命大知海毗盧遮那佛

如是我聞……………(以下畧)

と書き出してありて、辰帙の第七卷に編入の佛本行集經第一とは書方に於て不同あるのみ。尾題に就いては寫本は佛本行集經卷一となつてゐるが、縮藏では佛本行集經卷第一と第の一字が多い。奥書はない。

本經の抄畧せるものに良定の佛本行略經八卷ある。一八七五年 Bodley 氏は此經の抄譯を出した。本經の内容は佛の誕生より出家、成道の化儀を説き併せて佛弟子の歸入に關する因縁を示してある。本經は發心供養品より阿難因縁品まで六十品、なるが故に所說多岐に亘つてゐる。

(17) 遺教經

この寫經も卷首は闕けてゐても經後は定全であるが、奥書はない。而して尾題につき縮藏では佛垂般涅槃畧說教誡經としてあるが寫本では遺教經一卷と畧號を用ひてある。縮藏では辰、十に收め

られ譯者は鳩摩羅什である。本經は佛最後の遺誡である。天台は之を小乗と判じたが後世大小兩乘に通ずるとする者多い。又本經は各宗に於て用ひられるがその中禪家には佛祖三經の一として重用視してゐる。従つて馬鳴の論を始め立派なる註疏が多い。

(18) 雜寶藏經卷第十

この寫經は宿帙第十卷に編入されてある吉迦夜(Kiṅkaṇḍa?)と曇曜との共譯の雜寶藏經(十卷)の最後の卷部と符合する。(紙極白い)しかし縮藏とその經文を比較して見ると題號は同じいが經の文字の出沒異字あるが様である。寫經は初を缺くが奥には、

經生令狐世康所寫 用帑廿張

とある。その筆蹟はスタイン本中にある勝鬘經義記に殆んど似てゐる。

本經は、諸經律等に見えたる事縁を集めたもので通計一百條からなつてゐる。

(19) 十誦比丘尼波羅提木叉戒本

本寫本は無首有尾ではあるが最後に尾題がない。只「比丘尼元暉所供養經」とある邊から見ると經題の如く思はれるが左様ではない一種の奥書であらう。(寫本の包紙にはやはりこれを經題にしてゐたらしいがこれは誤りである)即ち比丘尼の元暉といふ者が供養の爲に書いた經といふ意であらう。(15)の奥書もその一例である。縮藏では張帙第七卷に入れてある法顯集出の十誦比丘尼波羅提

本又戒本（一卷）に相當するものであるが字の異同しばしば見ゆ。

この寫本の比丘尼元暉所供養經といふのとよく相似てゐるものに、北京學部本の戒緣下卷（佛典の研究一六七參照）の奥書がある。それには比丘法救所供養經、太安四年七月三日唐兒祠中寫竟、云云とある。即ちこれも比丘の法救といふものが供養の爲に書いた經なることは勿論である。而して太安四年（西曆四五八）とは魏の文成帝の年號であつて、宋の孝武帝大明二年に當る。

（20） 孔雀王呪經

この寫經も卷首は闕けてゐると共に全體に亘つて破損してゐるが、卷末には木製の細い軸を有してゐる。今之を縮藏の中に索むれば成帙第八卷收容の鳩摩羅什譯に符合するもので（梁の僧伽婆羅や義淨譯ではない）尾題も全く一致するが奥はない。經文を比較して見ると文字の異同多いらしい。本經寫本を縮藏に比すれば經文殆んど存してゐる。

（21） 大智度論卷二

本寫本は復卷の初後を缺いてゐるが爲め一寸見た所何れの經典たるか判斷し兼ねたるが、よく解讀すると羅什譯智度論なることを確め得たので益々考究の結果その中の第二卷の一部なることを發見した。文字及び用紙は實に優美でうたゞ快感を覺えるものがある。

（22） 大智度論卷第九十五

本寫本は經の前部は破損してゐるが經後は立派に残つてゐて、その上に立派な奥書が付いていて一種の供養論として所寫せられたることは明かであらう。

大業三年三月十五日佛弟子蘇七寶爲三父母敬寫大智度論一部以此善根先願法輪掌轉國祚永隆五穀豐熟人民興盛當今世考妣栖神淨土面奉慈尊見在眷屬炎殃彌滅方善扶陳逮及法界含生永離羈羈齊成正覺

### 勘校定畢

大業三年とは隋の煬帝の年號で西曆では六〇七年に當り我國では法隆寺建立の年である、本論は羅什が弘始三年（西曆四〇〇年）より同七年（西曆四〇四年）までに譯了したものであるから、翻譯後二百年にして燉煌地本に智度論が書寫せられたことがわかる。支那の汪大燮氏の所有の中にも燉煌寫本の智度論卷第三があつて、その解説を妻木氏が東洋學報一ノ三にしてゐられるから今は畧するがともかく誤寫脫文多き現存の大智度論の研究上殊に重要な資料であらう。

而して支那に於ける論部の流行に就いて一言すると、大體西曆四百年以後に譯されたものであつて、それ以前には殆んどない。だから論部は經部よりもやゝ後れて研究せられた。即ち經が翻譯せられて、それが一通り完備して翻譯の時機が終ると順序として經典内容の研究が必要となつてくる。こゝに於て論部の反譯が勃興して來るのは理の當然であらう。だから燉煌地方に論は割合に少

いのもその爲であらう。

以上概述した所で谷大所藏の燉煌寫經中縮刷藏經に收容せられてゐるものゝ解説は一通り終つたつもりであるが、終りに寫本全體として見ると律論の兩部よりも經部が多く、就中殆んど全部が大乗教に屬してゐて南方よりも北方佛教によりて最も多く影響されてゐることを記憶して置かねばならぬ。

而して寫經を通じての所寫年代の範圍は大體に於て、唐初及びそれ以前六朝にまで溯ることが出来る。大分長くなつた故、次から簡單に藏外並に不明經典の寫本に就いて述べやう。

(23) 大通方廣經卷中

本寫經は無首有尾の卷子であるが尾頭に大通方廣經卷中とある所から見ると、全く藏外の經たることは疑へない。支那の汪大燮氏所有の燉煌本中にその上卷があつて、それに就いて妻木氏は東洋學報に解説を加へて居られるから蛇足を止めることゝする。但し同氏の解説によるとその上卷の尾題には大通方廣經卷上とあるといふことである。果して然りとすれば谷大本は正しくその中卷に相當するものであつて、こゝに於て同氏が三卷本か或は二卷本かと疑つてゐられた事が明白となつた譯であらう。即ち方廣經は上中下三卷本たることは確實である。今一つ開元錄第十八三十偽妄亂真錄に「方廣滅罪成佛經三卷亦云大通方廣懺悔滅罪莊嚴成佛經亦直云大通方廣經」といひ内典錄にも「方廣滅罪成佛經三卷」といふてあ



る所から見ても上下二本ではなく上中下三卷なることをより確實に反證するものである。

次に本經の内容であるが既に開元錄にも「亦云大通方廣懺悔滅罪莊嚴成佛經」とある別名から見れば、その説く所は人間信仰の理想である懺悔滅罪の思想であることは疑ふ餘地はない。而して本經は全く藏外の經典であつて、この思想をよく理解してゐる當時の支那人が作つた所の一種の巧妙な僞經である。それで開元錄第十八(三十右)、大唐內典錄第十(七十右)の僞經部にも本經が入つてゐる。今谷大本の奥書を見ると、滅罪供養の爲めに所寫されたものであつて、「願亡夫承此善目遊魂淨土面觀諸佛永離三途長超八難……」等の文句はその間の消息を露骨に表現してゐるものと云へやう。即ち

開皇十年十一月廿日清信女董仙妃稽首和南

十方一切三寶今謹爲亡夫曹雅造此經一部流通供養願亡夫承此善目遊魂淨土面觀諸佛永離三途長超八難耳 飡法音心悟智忍普共六道同向菩提

とはその奥書の全文である。これによると開皇十年(隋の文帝の年號で西曆五九〇年)に清信女董仙妃が、亡夫曹雅の供養經として所寫したものである。

終りに一言すべきことは本經には直接關係はないが、それは燉煌本が谷大に所藏されるまでの出來事である。即ち前にも一言した如く燉煌寫經が谷大へ來た當時は二十九卷とされてゐたが研究を進めると、それが本寫經を中途より裂斷して二卷と數へてゐたことがわかつたのである。であるか

ら實際は二十八卷である。

(24) 救疾經一卷

本寫本は卷首は之を缺くも尾頭には救疾經一卷とあるから、恐くスタイン本中のものと同種のものであらうと思ふ否全同であらう。何となれば同博士が少しく引用せる經文があるが、之を谷大本の該部に比較すると符節を合するほどよく同じいからである。それで矢吹博士が宗教研究三ノ十の「燉煌出土疑偽古佛典に就いて」の中に救疾經の事を詳細に記述されてゐるから之も解説を省畧する。これから見ると本偽經も一時盛んに所寫せられたものであらう。奥書はない。(尙矢吹博士の同論文は偽經研究上頗る有益なるものたることを一言附加して置く。)

(25) 佛名經

此寫經は初部は之を闕くが卷末には十方千五百佛名一卷とし、一行に三佛づゝの名を書いてある所から考察すると佛名經の一種たることは疑ひない。元來佛名經といふものは單に諸佛の名號を列記してあるのみで一見何等興味のあるものではないが支那に於ては一時翻譯又は偽作されたものが實に夥しいことであつて、現に縮刷藏經の中に編入されてゐるだけでも佛說佛名經十二卷(元魏菩提流支 Bodhiruci 譯)「黃帙第一」以下十數部もある。その外では開元錄第十四(結五)重・單兩譯闕本の中にも、

百佛名經一卷、現在佛名經三卷、賢劫千佛名經一卷、諸方佛名功德經一卷、十方佛名經一卷、諸經佛名二卷、三千佛名經一卷、稱揚百七十佛名經一卷、南方佛名經一卷、滅罪得福佛名經一卷、賢劫五百佛名一卷、十方佛名經一卷、現在十方佛名經、過去諸佛名一卷、千五百佛名一卷、五百七十佛名經一卷、

等と種々の佛名經を出し、又同第十六支派別行(結五)の中にも、

三十五佛名經一卷、佛名經一卷、菩薩名經一卷、寶海如來等十方百七十佛名經、德內豐嚴王佛名經一卷、過去五十三佛名經、賢劫千佛名經一卷、同號佛名經、

等あり、尙同第十八偽妄亂直録にも、(結五)

佛名經十六卷、八方根原八十六佛名經一卷、(法經の衆經目錄第二結一參照)

等の諸佛名經の名稱を擧げてゐる。斯の如く經録には眞偽難多の佛名經があるが何故支那に於て殊に盛に行はれたのであらうか。思ふに佛名經を讀誦し思惟し讚嘆する者に現世安穩にして諸難を遠離し、諸罪を消滅して來世に無上菩提を得べきことを述べてあるから、上流よりも下流一般民間信仰の對象として唐の中頃廣く用ひられたものではなからうか。だからその内容に就いては鄙俗の點が少なくないものがある。今佛名經に對する智昇の批判を見るに次の様である。(結五四三右)

右一經時俗號爲馬頭羅刹佛名似是近代所集、乃取留支所譯十二卷者、黃一所收錯綜而成、於

中取諸經名目取後辟支佛名及菩薩名諸經阿羅漢名以爲三寶次第、總有三十二件、禮三寶後皆有懺悔、懺悔之下仍引馬頭羅刹偽經置之於後、乃以凡俗鄙語雜於聖言、經言抄前著後抄後著前前後著中、中著前後此正當也、尋其所集之者全是庸愚、只第四卷中云南無法顯傳經在法寶中列此傳、乃是東晉平陽沙門法顯往遊天竺自記行述元非是經、置法寶中誤謬之甚、又如第九卷云南無富樓那南無彌多羅尼子此是一人之名分爲二唱、次云南無阿難羅睺羅此乃二人之名合之爲一、如斯謬妄其數寔繁不能廣陳畧指如右、群愚傲習邪黨共傳若不指明恐穢真教故述之也、これによつて偽經の一般性質が知られるから説明を省く。前述の様であるから佛名經は支那のみならず朝鮮、我國にも古來可なり盛んに行はれ、就中我國では承和十三年(西曆八四六)より延喜十八年(西曆九一八)までの佛名會には、十六卷の佛名經が依用されたらしいのである。ともかくこの經の流行は一般民族信仰の心理として單に一佛に限らず諸佛の名號さへ多く念すれば大なる功德利益が與へられるものと信じた結果に外ならぬ。

終りに本寫經の諸佛名には南無の二字が冠せられてなく、又現行本の何れにも符合せないから、恐らく前に列記した諸經中の何れかにあるかも知れぬ。(スタイン、ペリオ本或は北京本の中にも佛名經が少しある)

(26) 菩薩藏(修道)衆經抄卷第十三

本寫本も卷首は闕けてゐるが卷尾があつて奥書はない。内容は題號の通り諸衆の經律の文を引用して各問題の解釋に當てゝゐる。今この寫本に引用されてゐる經名を擧げると次の様である。

大般涅槃經卷第廿二、華嚴經、大集經卷第十六、大品經卷第三、集一切福德經卷第二（集一切福德三昧經？）、佛說淨業障經、寶雲經卷第一、相續解脫經一卷、（寫本の所々に不明の朱印あり）これで見ると或は僧侶自身の覺書の様なものではなからうか。

（27） 戒律に屬するもの

この寫本は無首無尾で且つ上下甚だ破損してゐるが文字は楷書筆勢實に好い。又谷大本中最長のものであらう。而してその内容は一見した所戒律部に屬する一種の注釋書の如きものであるが、恐らく現行本中の何れにも適合しない。（道宣の四分律行事鈔にやゝ似たるか）だから本書の本文研究は戒律研究上頗る面白いことであらうと思ふが今は畧して置く。終りにこの寫經内に見ゆる綱目を擧げると次の如くである。

無爲出離（？）

師徒法第二

衆僧法第三

行道懺悔滅惡法第四

行道修善法第五

發道資緣法第六

信施擅越法第七

護持法藏第八

本卷の包紙には「護持法藏」とある所を以て見れば或はこの卷は殆んどその全文あるらしいが、その程度が頗るあやしい。

(28) 不明經卷

本寫本は卷首卷尾共に闕け更に經文短かい故にその經文は何經たるかを判斷するに困難を感じてゐる。而して本殘卷には藍達王といふ王名が出てゐるが、殘念ながら何等手懸を見出すことが出来なく、従つて何經に相當するか全然不明である。

六

以上之を要するに杜撰ながら大谷大學本（これは便宜上筆者が付けたる名）の畧解は終りを告げるのである。此等古寫經は量に於てはスタイン、ペリオ、及び北京學部等のそれらに比しては不完全な點はないではないが、質に於ては各種の方面、就中經典並に字態の研究上珍貴の資料であつて、彼等に遜色する所なく吾人を裨益すること頗る大なるものがある。しかしスタイン、北京等の諸寫本を觀見し能ざるは殘念である。今若し彼等諸多の蒐集本を谷大本に比較研究することを得ば諸多の方面、殊に佛教界に多大なる發明を齎し得るであらうと思ふ。又前にも一言して置いた如く寫本佛典の內的本文批判は後日を期して草することゝする。最後筆を擱くに當り世界的に一大寶庫の扉が我々の前に開放せられたるを慶喜すると共に、篇末ながら學界の爲め謹んで寫經を寄賜されたる我が法主台下に對し、深く感謝の意を表し奉る。（十四・三十了）